

## 音韻条件による連濁しやすさの一解釈

浅井 淳

(大同大学)

日本語の連濁には語種、統語、意味、馴染み度、歴史的変化など、さまざまな要素が関わり、生起率が総じて約半分と混沌とした状況だが、ここでは、テキストデータ(国研, 2006)に基づいて後部要素が和語 CVCV 構造に絞った上で前部要素との関わりには制限を付けずに多くの語を見ることで、連濁の受けやすさに対する音韻条件について再検討する。

はじめに、語の構成として前部要素が2モーラの場合に連濁を受けにくく、日本語の持つ構造的な無標性が確認される。次に、連濁箇所である後部要素頭の子音については、調音点(Cor>Dor,Laryn>Lab)、調音様式(stop>cont, strid)ともに無標性が高いほど連濁を受けにくく、撥音後続条件についても同様であることが確認される。そして、前部要素末モーラの子音が阻害音の場合、その調音に関する無標性が高いほど、形態素境界をまたいで同じ阻害音が後続するときの有声/無声異化が小さくなる。つまり、調音に関する無標性はいくつかの条件下で有声/無声交替への耐性に関わることが示唆される。

さらに、複合名詞に起伏式アクセントが付与される場合に連濁を受けにくいとすれば、それはピッチ下降のプロミネンスによる形態素境界条件の顕現化のためと考えられる。和語名詞構造に関する特徴として、今回のデータからは語頭が母音の場合、CV 構造と比べて有声よりも無声阻害音が続きやすく、語頭プロミネンス実現に関わっている可能性があり、境界条件の顕現作用に無標性に関わることが示唆される。

このようにデータを総体的に見て、IDENT(voi)には調音に関する音素レベルの制約ならびに構造上の EDGEMOST(prominent; Left; Wd/Morph) 制約が相互作用して連濁の受けやすさにつながる、という解釈を試みる。